

日本語の特徴の第一は、何と言っても“テニヲハ”であらう。これは、言語学的には、“^{かうちやくご}膠着語”と呼ばれる、ウラル・アルタイ語族に属する民族に共通した言語の特徴であるが、これに属する民族は、日本民族を除くといづれも少数民族であり、その中には、満洲民族における満洲語のやうに、今は全く語られなくなってしまった言語も決して少なくはない。

世界の言語の大部分は、欧米諸語のやうな“屈折語”、もしくは中国語のやうな“孤立語”の、この二つのいづれかに属してあると言っても良い程なので、“テニヲハ”がウラル・アルタイ語系の言語に共通した特徴であるとは言っても、これはやはり日本語の特徴の第一に挙げない訳には行かないものである。

英語でも、孤立語の中国語でも、一つ一つの言葉の意味や役割(品詞)は、その言葉の文章上の位置によって決する。

例へば、英語の rain という言葉は、文頭に在って主語の働きをしてある時には“名詞”であって、日本語の“雨”に当るが、rain coat という場合は“形容詞”であって、日本語の“雨の”という言葉に当る。また、It rains における rain は、“動詞”であって、日本語の「雨が降る」といふ言

葉に当ってゐる。

私たちと同じ漢字を使ってゐる中国語ではあるけれども、“風雨”の“雨”は日本語の“雨”と同じであって“名詞”であるが、“雨衣”の“雨”は英語の rain coat と同じく“形容詞”である。また、「某日大雨」といふ文における“雨”は英語の It rains の rain と同じで“動詞”である。(だから、漢文では「大_ニ雨_ル」といふやうに送り仮名を付けて訓んでゐる)

日本語を、屈折語に属する英語や、孤立語に属する中国語と比較してみれば、その特徴がよく解るやうに、日本語は“テニヲハ”といふ膠着語だけが有つ言葉のお蔭で、言葉の意味や役割が実に明確に表現できて、耳で聞いてみても全く紛れる恐れが無い。

これに反して、中国語の場合は、“雨”に英語の rains や rained といふやうな変化さへもない、文字通り“孤立語”なので、文章上の役割も意味も、正しく受取れないことがよく起り得る。これは、言葉の性格に因るので、全く止むを得ない欠点である。

然しながら、短所は長所でもある。いろいろに受取られる恐れがある中国語は、そのため、文学作品においては、むしろ深い味はひがあつて、曖昧な所に何とも言へない魅力が感じられる。

とは言ふものの、正確な表現をぜひとも必要とする科学的な文章に

日本語の再発見

は、どうしても不向きな言語のやうに私には思へてならない。昔から、文学面や思想面では非常に優れた作品が多く創作されてゐるのに、科学の面ではその割に遅れてゐるやうに見えるが、それはこの中国語の特徴に原因があるのではないだろうか。

テニヲハは、全く「概念を有たない」、膠着語特有の言葉である。屈折語や孤立語においては、前置詞がやゝこれに似た言葉であるが、これには概念を有ったものがあるので、決して同じものとは言へない。

また、関係代名詞として使はれる時の言葉は、本来の概念を全く表さないで使はれてゐるけれども、その言葉そのものは明瞭に概念を有った言葉であるから、テニヲハとは全く本質が異つてゐる。

中国語でも“所”といふ字が、関係代名詞として使はれる。そのため、昔の中学では、英語の関係代名詞を翻訳する時に、「……する所の……」と言ったものである。日本語には、動詞に活用といふ働きがあつて、その連体形が、英語や中国語の関係代名詞の働きをしてゐるので、それを使へば「……する所の……」などと言ふ必要は全く無いのである。

テニヲハは概念を有たない言葉であるから、独立して用ひられることは全く無い。必ず概念語に膠着して用ひられるので、“膠着語”といふ

名がある訳だが、このテニヲハによって、その概念語の文章上における役割が実に明確になることは、屈折語や孤立語では絶対に望めない程のものがある。

例へば、「僕は君に本を上げる」といふ文章における“は”“に”“を”がこれであるが、これが“僕”“君”“本”などの概念語に着いて、それぞれの言葉の有つ役割を明確に表現してゐるのである。

そのため、“僕は”“君に”“本を”といふ三つの言葉の順序をどのやうな順序に並べ替へても、意味が変化したり、混乱することが全く無い。その事は、同じ漢字を用ひてゐる中国語と比較してみればよく判ることである。

「我給你書」(実際の会話ではかうは言はないが、文章として書けばかうなる)この語順は一語といへども変更を許さない。例へば、“我”と“你”とを入れ替へたら、与へる人と貰ふ人とが反対になってしまう。また、“我”と“給”、“給”と“你”とを入れ替へたら、全く意味の通じないものになってしまう。屈折語や孤立語においては、語順を一定にすることを厳しく守る必要がどうしてもあるのである。

では、語順を守りさへすれば、文意が必ず誤解することなく通ずるかと言ふと、必ずしもさうは行かない。それで、中国の古典には昔から幾通りもの解釈が行はれてゐて、私たちは古典を読むたびに、そのいづ

日本語の再発見

れを取ったら良いのかに、いつも悩まされたものであった。(この「幾通りにも解釈できる」といふ事は、悩まされる所ではあるけれども、またそれが面白い所でもあることは、先にすでに述べた通りである)

その点、日本語は、「僕は本を君に上げる」と言はうと、「君に本を僕は上げる」と言はうと、その他、どんな語順に並べ換へたところで、テニヲハが着いてある限り、それらの言葉の役割(格)は判然としてあるので、文意が混乱して通じなくなるといふことは全く考へられない。

英語は、“I give you a book.”と、やはり語順を一定に守る必要がある点において、中国語と変りがない。たゞ、代名詞だけであるが、“I, my, me”といふ、日本語の“僕は”“僕の”“僕に”といふ意味に当たる“格変化”なるものがあるので、中国語よりも正確な表現が可能である。

とは言へ、“me”だけでは、“僕に”と“僕を”といふ、間接目的語と直接目的語とを区別することまでは出来ないし、その上、この格変化は代名詞だけにあって、名詞には無いので、中国語とそれ程の差は無い。何としても日本語の素晴しさはテニヲハがあることである。テニヲハは、言葉ではあるが概念が無い。「物あれば必ず名あり」で、概念があれば、それを表すための言葉が作られるのは、人間の社会では言はば当然の事である。然し、「概念の無い言葉」……「概念を有った言葉に着いて、その言葉の役割を明確に表すための言葉」を作り出したといふこと

は、考へてみればみる程、実に偉大な事だったと感嘆せずにはゐられない。このやうに素晴らしい言葉を作ってくれた我が国の遠い先祖に対し、私は心から尊敬と感謝の念を懐かざるを得ない。